オシラサマの事例から紐解く新たなトドサマ像
── オナカマと神を繋ぐ執物の一考察 ──

The New Image of *Todosama* Unraveled by Examples of *Oshirasama*
— A Consideration for *Torimono* that connects *Onakama* and God —

髙橋　愛未　TAKAHASHI Narumi

要　旨

山形県最上・村山地方では、オナカマと呼ばれる口寄せを生業とする盲目の巫女が活躍していた。トドサマとは、主にオナカマが神様の託宣を聞く際に用いる2本１対の布で着膨れた執物であり、東北地方全域で信仰されるオシラサマと巫女の関与や形式的な点において共通点が多いものであるが、先行研究において、オシラサマ等とトドサマとの比較研究がなされていない点に着目した。

本研究は山形県内各地方及び東北地方におけるオシラサマの事例を通して、新たなトドサマ像を見出すことを目的としている。研究の結果、形状が類似する神像であっても全てを同一神と捉えてはならず、トドサマは御幣から発達した男女の区別がある執物である可能性を指摘する。

キーワード：トドサマ　オシラサマ　執物　オナカマ

はじめに

山形県東村山郡中山町に、「岩谷十八夜観音庶民信仰資料」という国指定重要有形民俗文化財がある。口寄せを生業とする巫女オナカマの商売道具、岩谷十八夜観音（写真1・2）が目の神様として信仰を集めていたことを示す奉納物など合計951点の資料であり、このオナカマ資料との出会いが私の研究の原点となった。

今回、研究のテーマをトドサマ（写真3・4）に選んだ理由としては、トドサマの研究がなかったことが大きい。トドサマを通してオナカマ習俗をより鮮明にすることができればと思い、本論のテーマとして取り上げることにした。この論文がトドサマ研究の始まりとして、オナカマやトドサマ、広く山形県の巫女について理解を深めたいと感じる方の力になれることを願い、地域に根付いた庶民信仰の一例として、この論文を手にして下さった方一人一人が、地元の歴史を見つめ直すきっかけになったらと思う。

第１章～研究全体における概要～

①オナカマとトドサマ、岩谷十八夜観音について

トドサマとは、2本1対の竹から作られた執物（とりもの）[1]である。これをオナカマは両手に1体ずつ持って揺り動かし、主に神様のお告げを聞く託宣（神オロシ）の際に使用した。トドサマを始め、神様を降ろし留めておくには、依り代が必要なのである（岩崎　2019a）。オナカマは神オロシの他に死霊の声を聞く仏オロシ、いわゆる口寄せと呼ばれるものや占い、祈祷なども生業としてきた。師匠に弟子入りをして修行を積み、「神ツケ」の儀式に成功すれば、正式なオナカマとして「商売」を始めることができたのである。

このオナカマの本山的機能を果たしていたのが、岩谷十八夜観音である。オナカマは自身の守り本尊として十八夜様を絶対的に信仰しており、特に村山地方のオナカマにおいては、その傾向が強い。神ツケの際に、十八夜様が憑かなければ正式なオナカマとして成巫することができなかったほどである。また、堂内から発見されたオナカマ道具は、みなオナカマが商売を辞める際、一生お世話になったということで酒一升とともに納められたものである。

②巫女について

オナカマとは山形県の最上・村山地方に伝承される口寄せ巫女の呼称であり、最上地方では、オナカマサンと敬称付けて呼ばれることもある。一般的に盲目の女性で、庄内地方にはミコ、置賜地方にはワカと呼ばれる同業者が見られる

が、このような口寄せ巫女は、山形県内に限った習俗ではない。青森県一帯や秋田県、岩手県の一部にはイタコ、宮城県にはオカミサン、福島県にはワカなどと呼ばれる巫女名が伝承されており、比較的に東北地方にはこのような習俗が最近まで残っていた。さらに、東北地方に限らず日本全国において巫女の存在は確認されている。関東では「イチコ」（柳田　1911）、山梨県では「いちっこ」（土橋　1947）、種子島では「モノシリ」（犀川　1947）など、かつては日本中に普遍的に見られる存在であった。また、沖縄県や奄美諸島の巫女をノロ、ユタと呼び、トキという男巫も存在したようである（稲福　2000.122）。さらに、口寄せ巫女以外の民間シャーマンとして青森県のゴミソや福島県のノリワラという突発的に神が乗り移るなどの体験を経て、修行の後、神様からの示顕を受けた者も存在する。さらに、神道系の宗派に属する神子も見られ、一口に巫女といっても様々な呼び名と種類があることがわかる。このような巫女の存在は韓国やロシアなど、世界中においても見られる普遍的な存在であり、異なる民族であっても根本的な思想は変わらず、神様を信じて祈り、未来を知ろうとする心は人種や時代が異なれど、変わらず在り続けている。

③問題の所在と研究方法

これまでトドサマは研究者の中心にはないテーマであったといえる。民俗学の草創期から議論されてきたオシラサマ（写真12）と多くの共通点を有しているのにも関わらず、トドサマに関する話題はない。また、トドサマとオナカマは密接に関わっているため、オナカマの研究が見られない限りトドサマの研究も見られない。そのような中で目立ったオナカマ研究として櫻井徳太郎や烏兎沼宏之の研究が挙げられる。特に烏兎沼は、岩谷観音に納められたオナカマ道具の発見とその後のオナカマ研究全体に尽力し、減少傾向にあったオナカマへの聞き書きと口寄せの録音、中山町内の伝承や宗教遺跡などを含めた視点でオナカマへの考察を行った。当然、その研究の中でトドサマの実態についても触れられている。しかし、いつ使うものなのか、どのような構造なのか、オナカマにとってどのような価値を持つものなのかといった目の前のトドサマから得られる表面的な情報のみで、県内他地方のオコナイサマや他県にて信仰されるオシラサマとの比較を通して得られる考察がなかったことを問題として指摘する。オコナイサマやオシラサマは、いずれもトドサマと同様に2本１対の竹や桑の木から作られた心棒に布、或いは和紙が被せられたものである。巫女の道具として用いられる場合もあれば、家の神として旧家などで祀られる事例もあり、地域によって偏りが見られる。しかし、いずれも巫女の関与や形式的な共通点が見られることから、オシラサマらをトドサマの比較対象とすることで、今まで比較的研究がされてこなかったトドサマに新たな見解を生み出すことができるのではないだろうか。

よって、本研究の目的は、「トドサマとは何か」を追い求め、トドサマの深層に迫るために比較研究という方法をもとに行っていく。オナカマに関する情報は、基本的に研究論文や関連する文献を用いて収集したものとし、トドサマに関する内容は、主に烏兎沼の『村巫女オナカマの研究』（1987）を中心に参考にしたものを既存のトドサマ像として扱うこととする。

④先行研究 ―オシラサマをめぐる論争―

トドサマの研究論文はないため、その周辺の神として代表的なオシラサマを取り上げた。この研究の大きな争点は起源を求めることにあり、大きく北方（アイヌ）起源説と国内起源説に分かれ、後者の説が主流であるが近年北方起源説の可能性が見出されている。

オシラサマの論文が初めて発表されたのは、明治27（1894）年の伊能嘉矩による「奥州地方に於て尊信せらるゝオシラ神に就きて」である。続く明治43年の論文にて、アイヌのオホシラカミをオシラサマの起源とした。昭和3年には、喜田貞吉もアイヌの宅神チセコロカムイにオシラサマの起源を求めた。しかし、同年、喜田の説に柳田は批判を述べている。柳田は、昭和26年に『大白神考（おおしらがみこう）』を発表し、オシラサマは家の神を祀る際に祭主が手にしていた木の執物に由来し、その祭主が主婦から巫女へと変化したと述べている（清野　2003）。この他、「御幣」、「祝い棒」、「削り掛け」をオシラサマの起源とする説が提唱されている。

第２章～山形県下のオシラサマとその諸相～

①トドサマについて

オナカマが巫業を営むにあたっていくつかの道具が必要となるが、主要なものとしては、死者の霊を降ろすためのアズサユミ、祈祷などに用いるイラタカの数珠、そして神様の御託宣を聞くためのトドサマがある。トドサマは2本１対の布で着膨れた40㎝程度の依り代で、心棒は竹でできている。

オシラサマを含め、「貫頭型(かんとうがた)」(写真9)という心棒の先端に男女や馬娘の顔を彫刻し、顔が見えるように布を被せた形式と、「包頭型(ほうとうがた)」(写真10)という心棒の先端を覆い被せるように布を掛けた形式に大別されるが、トドサマは全て包頭型で貫頭型は見られない。また、トドサマという呼称は主に村山地方にて伝承され、最上地方ではトドコなどと呼ばれた。置賜地方の巫女であるワカもトドサマを所持していたが、本尊様、御幣サマ(月光　1989)と呼ぶ巫女もいたようである。

トドサマは神ツケの儀式で本人が手にしていたボンデンに紅絹などの布を掛けてつくったものであり(桜井　1974)、実際に烏兎沼もトドサマを分解して棒の先端に巻かれていた和紙が神ツケ時の幣束であることを確認している(写真5･6)。その上に江戸小紋や紅花染の布が何十枚も被さり、宮本常一は村山地方の染織、文化交流の歴史が明らかになるのではと述べている(烏兎沼　1987:PP･116-117/筆者要約)。また、烏兎沼がオナカマへのトドサマに対する聞き書きを行っているが、巫女以外の者がトドサマを所有する事例は見られず、トドサマはオナカマの巫具という性格のみを有しているといえる。

②庄内地方のオコナイサマ

ミコ、ミゴと呼ばれる口寄せ巫女が存在するが、巫具にトドサマのような執物は見られない。巫業はオナカマと同じように口寄せ、神オロシがあるが、オコナイサマ(写真7)の衣の着せ替えとアソバセが加わる。

オコナイサマとは、2本１対の篠竹から作られた御神体で、布ではなく和紙を纏っている点が特徴的である。主に田の神として旧家の神棚で祠に収納された状態で祀られる。基本的にその家の女性が扱うことになっているが、温海町山五十川地区では、着せ替えを神主が行い、男性が関与している。また、アソバセとは、着せ替えの後、ミコがオコナイサマを手にして神歌を歌い、託宣を聞く行為のことをいう(菊池　2015)。

③置賜地方のオタナサマ

ワカと呼ばれる口寄せ巫女が存在し、巫具としてトドサマを所持しているのだが、農家筋の旧家ではオタナサマ、オトウカサマ、オ十八夜サマなどと呼ばれる家の神が存在する。置賜地方一帯に見られる、この地方特有の信仰とされているが、宮城県や村山地方の一部でも確認されている。

形式はトドサマのように2本1対のものも見られるが、ヘラや木皿といった御神体として見なせない形のものが多く、米沢市南原には生紙で天井裏に御幣を吊るしている事例があり、オタナサマの原型に近いのではないかと考えられている(米沢市史編さん委員会　1990)。また、オタナサマの司祭にワカが関与する事例は見られず、ほぼ女性ではなく男性によって祀られる点も特徴である。

④最上･村山地方のオシラサマ

トドサマ以外に2つのオシラサマを確認した。1つ目は、最上地方の戸沢村角川十二沢にある白山(しろやま)神社にて祀られるオシラサマである。最上郡内では極めて珍しいオシラ神とされ、御神体には顔があり、白地らしき着物を着た神像である。桑の木で作られ、養蚕の神として信仰を集めたいたようだが、オナカマとの関係性については不明である。

2つ目は、村山地方西川町の歴史文化資料館に収蔵されているオシラサマ(写真8)である。西川町歴史民俗資料館のデーターベースによると、「カミサマ」と呼ばれ、安産の神様として祀られていたという。御神体は紙と布を纏い、庄内地方のオコナイサマと似ており、トドサマと比べると2体の個体差が激しい。また、このカミサマは、ダム建設で水没した砂子関地区にあったもので、他にも十八夜様と呼ばれる同形式の神様が祀られていた。オナカマの関与についてはこちらも不明である。

⑤本章のまとめと考察

このように、形状が類似する神像でも、口寄せ巫女の巫具として機能するものと家の神として機能するものに大別できる。そのため、形式的な共通点だけで全てを同一神と捉えてはならず、2本で1対の形式を持つ木の偶像は、異なる機能を兼ね備えたものであることを理解しておく必要がる。また、どちらの性格であっても、皆共通して紙が使われていることが見えてくる。トドサマも布を取り除けば紙の幣束が現れ、オコナイサマやオタナサマの特徴に近づく。この点は、次章の東北のオシラサマと比較の上、考察を述べることとする。

第３章～巫女と人々に根付く東北各地のオシラサマ～

「①イタコの本山とオシラサマの拠り所」

卒業論文では、オシラサマ信仰の重要な拠点となってい

る恐山、久渡寺、大和教と大乗寺についての説明を行っているが、本稿では紙数の都合上割愛する。

以下は、東北各地のオシラサマの実態の他、巫具、または家の神としてどのように扱われているのか、アソバセに巫女の関与があるのかに注視して文献より抽出したものである。各県の御神体の形式的特徴や性質は全て山形県の事例と共通しているが、オシラサマアソバセの際にイタコを家に招き、司祭を行う事例が多く見られ、イタコがオシラ祭文を唱えることがある。

②東北地方のオシラサマと巫女の関与

（1）青森県

下北半島のイタコにとっては、オシラアソバセは重要な巫業となっており、この地方の旧家ではオシラサマを祀らない家がないと言って良いほど信仰が篤い。東通村のオッシラサンの御神体は、桑の木の先端に人間の顔などが彫刻され、男女や雄雌の区別がされている（桜井　1977）。

南部地方及び三八地方のイタコは、基本的にオシラサマを巫具として所持していないが、八戸市二十六日町のイタコによると、オシラサマは巫具として皆所持しているもので、旧家でも祀られる神様のようである（文化庁文化財部　2007）。また、同市鮫町でシラガミジュウゼンを代々守る巫女は、オシラホロギの依頼を受け、到着後、「オシラサマの装束」を作っている（佐藤　1989a）。

津軽地方のオシラサマは、その数2,000以上といわれ、久渡寺型と呼ばれる大型のオシラサマが存在する（写真11）。西津軽郡鰺ヶ沢のイタコが持つオシラサマは、久渡寺から受けてきたもので、左手に男、右手に女を持つ、夫婦の対となった御神体である（佐藤　1989a）。この地方のイタコはオシラサマを巫具として用いることはない。イタコは盲僧系の宗教に属した者と師弟関係を経て巫業を営む者に分かれ、前者であればオシラサマを持たず、後者であれば所持すると述べられている（文化庁文化財部　2007）。

（2）岩手県

二戸市のイタコは、基本的にオシラサマを所持することはなく、アソバセの依頼を受けることもない。そもそも二戸にはアソバセの習慣がなく、オシラサマとイタコは関係なものとして成り立っている。一方、県中部のイタコは基本、呪具の一つとしてオシラサマを所持するようである。持っていないイタコも存在するが、オシラサマや呪具といった巫具は師匠から譲り受ける習わしがあり、守り神、イタコの神様と信じられている（文化庁文化財保護部　1985）。

遠野市は、『遠野物語』で知られているように、オシラサマの聖地といっても過言ではない。『オシラ神の発見』（遠野市立博物館　2000）によると、市内に169体のオシラサマがあることが報告されており、男と女、馬と娘が描かれた貫頭型が7割を占める。オシラサマを祀ることを「オシラ遊び」などというが、今日においてそれに巫女の関与は見られない。また、オシラサマ信仰が色濃く残っているといわれてきた旧附馬牛村では、イタコの関与は全く見られないが、オシラサマは神ツキ後に授けられたというイタコの事例が確認できた。旧土淵村の事例としては、ニコライ・ネフスキーの『月と不死』にて、オシラサマは狩猟に必要な道具と考える家があることを伝えている。

一関市の巫女はオガミン、オカミサマなどと呼ばれる。東磐井郡旧川崎村のオカミサマは、巫業の道具は憑いた神様によって異なり、オシラサマや笹などを使うようである（佐藤　1989a）。同郡のオカミサマについて柳田は、神がかりの際、男神を左手に、女神を右手に持って打ち振りながら物語をすると報告している（柳田　1911）。文化庁文化財部（2007）では、包頭型のオヒラサマを所有するオカミサンは、業具として、巫女を加護する神として大切であると伝えている。また、この御神体は、神ツキ後に師匠から授与されたようである。この他、盛岡市では託宣のための必要なる神、花巻市では弱い子を加護する神として信仰される事例が確認できた。

（3）宮城県

県沿岸部にてオッシャサマ信仰が集中して見られ、本吉郡旧唐桑町が顕著である。包頭型が多く、アソバセを巫女に頼む事例も多い。巫具としては、親戚から竹製のオシラサマを譲り受けた巫女の事例があり、右手に男、左手に女を持っていたようである。気仙沼市も同様に包頭型の御神体が比較的多いが、太子像をオシラサマと考えている事例が見られた。

旧東和町の巫女は、師匠から授かった大名竹でできた包頭型のオシラサマを持ち、祈祷の際に使用した。別の巫女も同じように、師匠から幣と竹でできたオシラサマを授かっている。登米市や石巻市においても同様に確認でき、後者ではオヒナサマと称して神オロシ等に使用するもので、地方の人はゴシンとも呼んでいるという（佐藤　1989b）。病気の子供を

オカミサンに貰ってもらうという事例も見られた。

柳田はオシラサマについて、宮城県南部の平野などではトデサマと称していること(柳田　1951)、ネフスキーは、仙台においてオトートサマ(オトウトサマ)と称することを報告している。これにネフスキーは、東北地方一円で蚕のことをトウドコ、トドコ等と称している点との関係性を指摘している(岡　1971)。巫具としては、神ツケに使用した幣に師匠が布を被せて作製したオトウトサマを所持するオカミンの事例が確認できた。竹でできた包頭型で、巫女の守護神として一生守ってくれる神であり、妙音菩薩の垂迹神であると信じられている。

(4)秋田県

オシラサマは巫女にとって必須の巫具ではなく、御幣や蝋燭などの「添具」の1つに数えられる神像で、数珠を「イタコの守り神様」として信じ、主要な執物となっているようである。

鹿角郡におけるイタコは、オシラサマを手にして死霊の口寄せを行うことから、イタコ自身をオシラサマと称するとの報告がある(櫻井　1974)。また、鹿角市毛馬内地区では、イタコがオシラサマを祀り、神仏を降ろす際に用いたとの報告が見られ、小坂町のイタコはオシラサマを両手に持って仏オロシを行うこと、山本町では男神には浅緑色、女神には赤色の絹布を着せるという事例が確認できた(斎藤　2003)。男神には白、女神に赤の布を掛けるという家もある。

仙北郡田沢湖町では、「女神神影掛け軸」と「巨石の泥人形」がオシラサマだという。生保内でも神影掛け軸はトドコの神様とされ、泥人形のオシラサマが養蚕の神様として信仰されている。この地方では、一般的な2本で1対のオシラサマやエチコの関与も見られない。県南部の雄勝郡田子内では、蚕のことをトドコといい、トドコの神様をオヒラサマと称し、オヒラサマを屋敷神として祀る家も見られた。

(5)福島県

オシラサマではなく、オシンメイサマと称されることが一般的で、貫頭型の御神体が殆どである(岩崎　2019b)。性格は、歩きたがる神様とされている。巫女は、ワカ、オガミヤなどと呼ばれ、所持する採り物は幣束の類が最も多い。

県北地域のオシメサマは、「伊邪那岐」と「伊邪那美」の対であると考えられている。この地方の巫女は神道系の者が多く、巫具として数珠や太鼓などを所持しており、神オロシの際には幣を使用する。オシメサマの関与は確認できなかった(文化庁文化財保護部　1992)。相馬・双葉地域でも神オロシや仏オロシの際、ほとんどの巫女は幣束を使用する。いわき地方のオシンメサマは、男女1対で主に女性が扱う神様とされ、オガミサマの指示で桜の木から作られたものがあった。

県中地域のオシンメイサマは家で祀られる場合、貸し借りや取子によってかなりの移動が見られるようである。巫具としての事例は1件確認でき、「朝日神明」と「金岡神明」の対であると考えられている。

南会津地方に伝わるオシンメイサマは、平成4年時点で合計5体であった。栗の木や竹から作られた2本1対の包頭型である。南郷村に伝わるオシンメイサマの内1対は、巫女の死後法印の手に渡ったもので、御神体の長い方が男神、短い方が女神だとされている。

③本章のまとめと考察

このように、地域や巫女によって違いはあるものの、2本で1対の木の偶像における性質や巫女の関与は、東北地方一帯に普遍的な信仰・道具として位置付けられる。

巫具としてのオシラサマを見ていくと、青森県では巫女の守護神として大切に取り扱うイタコがいることから、他の道具よりも強く深い関係性が伺える。岩手県も同様に巫女を加護する神として大切に扱われ、且つオシラサマなどの道具は師匠から譲り受けるものであった。同様に、宮城県でもオシラサマは師匠から譲渡し得るもの、神ツケ時の幣束から作ったものであったことから、巫具としてのオシラサマの発生はこのいずれかに該当することがわかる。また、青森県の久渡寺型のオシラサマ、秋田県の掛け軸や巨石の泥人形をオシラサマと称して信仰する点、福島県では、オシンメイサマを男女の対と区別する以外にイザナギとイザナミや伊勢神明と熊野神明とする点が特徴的であるといえる。

第4章～トドサマとは何か～

①オシラサマとの比較

大きく2点について考察を述べる。まず一つ目は、トドサマの発生に関してである。トドサマ内部には幣束があるが、それは神ツケの際に使用した御幣をトドサマへと加工したものであった。これは岩手や宮城県の事例と共通するもので、トドサマを含めオシラサマは御幣から発達した執物で

あると考える。オシラサマ御幣説は既に喜田や柳田らによって指摘されているが、本研究を通して、新たにその説の裏付けに繋がったといえよう。また、これら執物は、共通した過程の中で発生している。師匠からの伝授と神ツケ後に作製される2点に大別できるが、神ツケは巫女が一生拝む、憑き神となる神様と契約する儀式ともいえ、巫女の今後の人生に大きく関わる重要な儀式である。その際手にしていた幣束に初めて神様が降りて来るのであり、その瞬間が最も重要な意味を成す。巫女が他の呪具よりも守護神として後生大事にしていることの根底は、ここであろう。その御幣を大切に守るために、普段着よりも綺麗で上質な布を着せることで、よりトドサマやオシラサマの価値や霊験を高めていったのではないだろうか。さらに形式に関し、巫業において扱うには、心棒の先端から包むこむことができる包頭型の方が適した形態ではなかったかと考える。実際に貫頭型のトドサマは見られず、巫女が所持するオシラサマも比較的包頭型が多い。

形式に関連し、今回の調査にて、包頭型のオシラサマにおける左右の個体差が幾つか見られた。南会津地域南郷村では、2体の御神体のうち、長い方を男、短い方を女だと考えていた。庄内地方のオコナイサマにも1対のうち、どちらかが2、3分短いものもあるとの報告がある（岡田　1951）。西川町のカミサマにおいても左右の個体差が目立ち、トドサマに関しては、全てではないが一定数長さの異なる対が確認できた。その理由は調査から明らかにできなかったものの、各事例を通し、トドサマにも男女の区別があったのではないかと考える。男女でなくとも、男神を左手に、女神を右手に持つといった事例があったが、これは2体を意味付ける必要があったと考えられ、貫頭型の事例に立ち返ってみると、これらの偶像は何らかの対でなければならないことが見えてくる。柳田の国内起源説を主流と考えるならば、本来イエという集団を支える夫婦、つまり男女を祀った神という一場面が残存したとの見解もできるだろう。

②結論

これまでのトドサマ像は、烏兎沼の調査によって築き上げられたものであった。それによりオナカマとトドサマの関係性はある程度明らかにされていたが、本研究を通し、オシラサマの比較によって見えてきた新たなトドサマ像として、「御幣が変化した男女1対の執物」ではないかと結論付ける。神様と人間が交わる上で、神様を降ろし留め、神様の所在を示すための装置が必要となるが、それが御幣であり、巫女になろうとするものが初めて宗教的体験を得る際に活躍する重要な執物である。それが神様を宿すためにより相応しい装いに変化していき、包頭型という形態が尊重されてきた。また、2本で1対である以上区別が必要なものであった。2体それぞれが役割を果たして1つとなり、その力や言葉が巫女の身体を借りて発揮されるのである。

結果的に、トドサマもオシラサマ研究に近い見解となったが、同一神とは言い難い。オシラサマ研究史の中にトドサマの一考察として新たに位置付け、まだまだ仮説に過ぎない結論だが、本論を通してトドサマの新しい可能性を見出すことができただろう。

③今後の課題

オシラサマの研究史上、アイヌのイナウや本州全体に見られる削りかけとの関与や関連性も考察する必要があったが、本研究ではその調査まで及ばなかった。また、伝承に関して、山形県最上地方を中心に遠野のオシラサマ伝承と類似する伝承があることを確認しており、戸沢村には物証として神社にオシラサマが祀られている。伝承面を切り口に、そこに養蚕や馬産といった関連する産業との結び付きも捉えながら、オシラサマ研究を進めることが必要だと考える。併せて、口寄せ巫女に関する伝承も中山町を含め各地で確認できているため、この点も踏まえてトドサマを復元していくことがより良いだろう。

これら神像と巫女はその地域の歴史と深く結び付くものであり、文献上の比較だけでなく、その地域の中で巫女がどのように根付いてきたかを考える必要がある。烏兎沼は中山町内の宗教遺跡や寺社などと巫女の関係性を深く考察しており、十八夜や湯殿山信仰についても示唆している。よって、地域の具体的な民俗との関連性を含めた視点で研究を進めることを今後の課題とする。

おわりに

本研究を通し、トドサマの普遍性、特異性をより明確にできたと考えている。オシラサマもトドサマも同じような系統に分類される一種の偶像であったが、似ている、似ていないという形式的な類似は調査のきっかけになるものの、その実態を知ることで違った一面が見えてくるのであった。

オナカマ習俗は既に終わりを迎え、私たちの生活には必

要とされなくなった存在である。ましてや、そのオナカマが巫業に用いたトドサマを研究する意義は何であろうか。本研究のテーマは、オナカマに対する興味関心から生まれたものであるが、人々の精神世界を支え、生活上の不安を取り除くために、神仏の仲介者という存在が過去の日常には必要であったこと、そしてそれを巫女がなし得るために、トドサマという道具が欠かせない存在であったことをより鮮明にしただろう。つまり、トドサマをみることはオナカマをみることである。オナカマという特異な存在が支えてきた歴史の上に、今でもその存在が見え隠れしながら、今日の私たちの生活が営まれているのである。

注

（1） 採物とも書く。祭祀の場で巫女などが手に持つ道具のこと。御幣や榊、幣などが該当するが、本論では神を降ろし留めるための巫具として機能するものを執物とみなす。

参考文献

・岩谷観音史跡保存会　1981 『図録　岩谷十八夜観音』
・烏兎沼宏之　1985 『霊を呼ぶ人たち』筑摩書房
・烏兎沼宏之　1987 『村巫女オナカマの研究』　藻南文化研究所
・遠野市立博物館　2000 『オシラ神の発見』　遠野市立博物館
・中山町史編さん委員会　1991 『中山町史・上巻』　中山町
・中山町史編さん委員会　2003 『中山町史・中巻』　中山町
・ニコライ・ネフスキー（岡正雄編）　1972 『月と不死』　平凡社
・日本常民文化研究所　1943 『おしらさま図録』　日本常民文化研究所
・文化庁文化財保護部　1985　『民俗資料選集14　巫女の習俗I』国土地理協会
・文化庁文化財保護部　1986　『民俗資料選集15　巫女の習俗II』国土地理協会
・文化庁文化財保護部　1992 『民俗資料選集20　巫女の習俗Ⅲ』国土地理協会
・文化庁文化財保護部　1993 『民俗資料選集21　巫女の習俗Ⅳ』国土地理協会
・文化庁文化財部　2007　『民俗資料選集　35　巫女の習俗Ⅵ』国土地理協会
・柳田国男　1999 『柳田國男全集　第十九巻』　筑摩書房（初出は、1951『柳田国男先生著作集　第11冊　大白神考』実業之日本社）
他、卒業論文参照

写真1 岩谷十八夜観音・拝殿（2021/11/28 撮影）

写真2 岩谷十八夜観音・本殿（2021/11/28 撮影）→

写真 3 トドサマ（2021/09/18 撮影）

写真 4 トドサマ（2021/09/18 撮影）

写真 5 トドサマの中心部（2021/09/18 撮影）

写真 6 トドサマのゴシン（2021/09/18 撮影）

写真７ オコナイサマ
（2021/02/13 致道博物館にて 撮影）

写真８ カミサマ（2021/11/18 撮影）
西川町歴史文化資料館にて撮影

写真９ 貫頭型

写真10 包頭型

写真12 オシラサマ
（2021 03/02 遠野市立博物館にて撮影）

写真11 久渡寺のオシラサマ

写真８、９ 日本常民文化研究所『おしらさま 図録 』1943 ）より転載
写真10文化遺産オンライン https://bunka.nii.ac.jp/heritages/detail/161431
（2021/12/01 閲覧）より転載